

2024

9

令和6年9月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻373号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

# とまろお

あ・さ・か・の・り・ん



公益財団法人

さわやか福祉財団



# いきがい・助け合い オンラインフェスタ2024

すべての人が幸せに  
暮らせる社会へ

目指せ 地域共生社会

\\ ぐちゃまぜにつながろう! //

## 参加お申し込み受付中!

“いきがいを持って支え合う住民主体の地域共生社会の実現”に向け、今年も「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」を開催します。これからの地域づくりに必要な考え方、助け合いの多様な働きかけ方を学べる本フェスタならではのプログラムです。

現在、参加お申し込みを受け付け中です。皆様のご参加をお待ちしています!

開催期間 **10月15日(火)～10月24日(木)**

開催方法 **完全オンライン配信形式**

11月30日(土)まで、ライブ配信プログラムを除くすべてのプログラムがアーカイブで視聴可能です。

(ライブ配信)

プログラム **オープニングフォーラム** **特別トーク** **学ぼう編** **語ろう編**

申込期間 **2024年8月14日(水)～10月24日(木)** (最終申込日)

参加費 **1000円(税込)**

- お支払いは、クレジットカード、コンビニ決済、銀行振込からお選びいただけます。
- 参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出して、地域活動を応援します。

申込方法 当財団ホームページ内オンラインフェスタ特設ページからお申し込みいただけます。

URL : <https://festa.sawayakazaidan.or.jp/>



お申し込みは  
こちらからも

◎プログラムは、26ページをご覧ください。

申し込み・視聴に関するお問い合わせ

オンラインフェスタ2024事務局  
(株式会社ストラーツ内)

メール [jimukyoku@strarts.co.jp](mailto:jimukyoku@strarts.co.jp)

電話 (0120) 536-083  
(050) 1809-0427  
(平日 10:00～18:00)

総合お問い合わせ

公益財団法人さわやか福祉財団  
オンラインフェスタ担当

メール [festa@sawayakazaidan.or.jp](mailto:festa@sawayakazaidan.or.jp)

電話 (03) 5470-7751  
(平日 9:30～17:30)

# とあ言おう

2024年9月号

## CONTENTS

### 2 新しいふれあい社会 実現への道

## 考えること、選択して決定することの意味

清水 肇子

### 4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

## 郊外型大規模団地の持続可能なまちづくり

認定NPO法人若葉台（神奈川県横浜市旭区）

### 12 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

## お寺の居場所で大都市のつながりづくり

NPO法人E-LINK / 寺小屋プロジェクト（北海道札幌市）

### 22 連載 共生社会 ー 認知症との新しい向き合い方 5

## 「認知症」および「認知症の人」について思うこと ー その3ー

社会医療法人財団石心会理事長・川崎幸クリニック院長 杉山 孝博

### 24 連載 人生100年 地域とつながる施設とは 5

## 介護の人手不足が止まらない 公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

### 新しいふれあい社会づくりに向けて

#### 18 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介 / 状況のご報告

#### 28 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・  
ご寄付者の皆様のご紹介

#### 29 活動日記（抄）

#### ㊦「いきがい・助け合い

オンラインフェスタ2024」プログラム

#### ㊧みんなの広場 / 投稿募集

㊨さわやかパートナーのご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう / 新・ひとりごと・迫田 朋子

# 考えること、選択して決定することの意味

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

地域の助け合い活動への参加を働きかけるとき、どのように「やらされ感」なく進めていけばよいのか。生活支援コーディネートなど地域づくり関係者の皆さんが常に悩む課題である。当財団では、住民同士のワークショップ（座談会）を含むフォーラムや勉強会の実施をずっと提案し、支援してきているが、その一番の理由は、住民の皆さん自らが生活者の立場で自由に意見を出し合い、気づき、考え、答えを見つけていける場となるからだ。個々の人が気づいていなかった地域や他者への状況理解を深めることにもなる。そして、具体的なニーズを共有することで自分事にもなり、共感が生まれ、自然にやる気にもつながっていく。中には、なぜ自分たちが考え、行動する必要があるのか、という反対の気持ちを持つ方もいるだろう。行政が責任を持つて行う必要があることまで押し付けてはもちろんいけない。しかし、関心を持つ人、できることであれば何かやってみてもよいと思っている人は、今、必ず地域にいるはずで、自分たちで決める機会があることで、意欲と新たなチャレンジを生み出すことができている。

自ら選択して決めることができるということは、人として本来幸せなことだ。行動の原動力となる。ぜひ地域づくり関係者の皆さんは、機会や場づくりを工夫しながら、住民の皆さんへの働きかけを続けていってほしい。

一方で、自己選択・決定と自立について、改めて考えさせられることがあった。自立とは、「自分のことは自分で行う」という考え方が長く認識されてきたが、今、自立の概念はもっと広く、様々な社会的支援を利用しながらも主体的に自由に選択したり決定できることであり、必ずしも自分だけですべてを行う必要はまったくない。ある委員会で、「地域社会では、まだ自助・自立が、自分のことは自分でしろという経済効率主義の冷たいメッセージになっている。自立支援の意味、自分だけで頑張らなくていいというメッセージをしっかりと打ち出してほしい」と意見を述べたところ、頷く方もいる一方で、専門職の立場を踏まえた意見として、理解はできるが現実には自分でできる可能性がある人は自らとにかく頑張ってもらいたいというメッセージを強く出すべき。そうしないと目指すこともしなくなる危険がある、といった趣旨の発言があった。皆さんはどう考えるだろうか。`できること`はやりましょうということ自体はまったたく同感である。しかしやはり違和感が残った。要介護状態や障がいの有無にかかわらず支援が必要な時期や事柄は誰でもある。まず自分で頑張ってくださいというだけでは、抱え込んでしまいかねない人が出て、それが悲しい事件にもつながっているのではないだろうか。

今年の「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」の応援メッセージで、田中滋さんが、「自助とは自分できずになさなければならぬことではなく、もっと緩いもの。自助と互助の境目は曖昧。自助とは互助を引きつける力、共助を上手に使う力、そして最後の砦である公助を上手に使い育てていくこと」だとおっしゃってくださいました。自ら選択して決めていくことで、互助の活動も広がっていく。結果として、公助のあり方への理解も進む。今年も、いきがい・助け合いオンラインフェスタを行います。ぜひそれぞれに考える機会として皆様のご参加をお待ちしています。



# 郊外型大規模団地の 持続可能なまちづくり

認定NPO法人若葉台（神奈川県横浜市旭区）

高度成長期に造成された全国の郊外型大規模団地に、待ったなしで少子高齢化の波が押し寄せています。住民が自分たちの手で諸課題を解決しようとNPOを設立し、多彩な活動にいっきと取り組む横浜若葉台団地取材しました。

（取材・文・境 朗子）

＊  
高齢化率は高いが  
要介護認定率は低い

JRの駅からバスで約10分。終点「若葉台中央」で降りて緑に囲まれた遊歩道を進むと、やがて「横浜若葉台

団地」（以下、若葉台）の西端に行き当たる。少しレトロな佇まいの旧市立若葉台西中学校が姿を現し、旧校舎の一角にある「認定NPO法人若葉台」（以下、NPO法人若葉台）が運営する「地域交流サロンふれあいにし」に

到着した。旧西中学校は2007年に統廃合せられ、跡地は地域住民のスポーツ・文化に関わるさまざまな活動に活用されてきた。スポーツやサークル活動を楽しむ住民たちは、月々金曜日10～15時開



全72棟の横浜若葉台団地

所のふれあいにしに立ち寄って、1杯100円のコーヒーや250円のカレールイスなどを味わいながら、採れたての野菜を購入したりしてくつろぐ。

ここで販売される野菜は、NPO法人若葉台が別の場所に借り受けた農園で、企業から派遣された障がい者と彼らを支援する地域ボランティアが栽培したものだ。2階にある「地域作業所若葉台ぶんげいざ」では、障がいのある人たち一人一人に寄り添いながら小物製作等の活動をしている。階下のふれあいにしから馴染みのスタッフが運んでくれる昼食も楽しみの一つだ。

郊外型の大規模団地、若葉台は1979年に入居を開始。約90ヘクタールに及ぶ広大な丘陵地に、自然との調和を大切にしながら未来志向の住環境を実現しようと開発された。72棟が立ち並ぶ中高層集合住

宅に6500世帯が居住、30年ほど前のピーク時には2万人以上が暮らしていたが、今は約1万3000人。団塊世代を中心に65歳以上が55%ほどを占めるようになった。

「若葉台ができたばかりの頃は、30年ばかり40代半ばの若い世代が中心に居し、子どもの声が響き渡っていました」。そう話すのは、若葉台の福祉課題に取り組んできたNPO法人若葉台理事長の白岩正明さん（78歳）。「当初から皆、まちづくりに力を注ぎ活気あるまちへと成長していきました。ところが、月日が流れるといつのまにか



認定NPO法人若葉台理事長の白岩さん

全国の大規模団地における高齢化等の課題は、これまで本誌でも取り上げてきた。そのような中、若葉台で特筆すべきは、高齢化率50%以上という高さに対して要介護認定率が14・5%（2023年3月現在）と、全国平均19・4%より明らかに低いことだ。なぜだろうか。

### あらゆる人が、支援が必要な人

「成年と子ども」のまちから、高齢者と少数の子ども「のまち」へと姿を変えていたのです」

「当初、まちづくりを推し進めてきたのは女性たちです」と白岩さん。1980年代は、「外で働くのは男性、家庭を守るのは女性」という性別役割分担担が一般的だった。だから当時の若葉台の生活上の課題をまず実感したのが「主婦」たちだったのだ。例えば、買い物する店が少ない。子どもの遊び場も少ない。交通の便が悪い、等々。目の前のニーズ一つ一つに向き合い、サ

1クルの立ち上げ、イベント開催など多様な活動を自分たちの手で始め、行政に向いて相談した。女性たちが肩書や立場とは無縁のフラットな関係を築きながら、相互理解を深め、課題を解決していこうとするさまに白岩さんは共感したそう。

神奈川県の職員だった白岩さんは、「当時は残業の少ない部署にいたので、帰宅後、女性たちと共に自治会活動などに勤しんでいた」という。やがて、民生委員児童委員協議会の会長、若葉台地区社会福祉協議会会長を歴任。そんな中、地区社協理事の一人である障がい者団体当事者が、理事会で問題提起した。「親亡き後の子どもを地域はどうサポートできるのでしょうか」。その言葉は白岩さんの胸に刺さり、あらためて「障がいの有無にかかわらず、共に学び合うインクルーシブ教育が大事故だ」と考えるようになった。

2007年、地区社協を中心に「障害者の居場所づくり研究会」が発足。2009年には事業の継続性のために

「NPO法人若葉台」が立ち上がった。基本理念は「すべては地域のために」。支援の必要な人たちが安心して心豊かに生活できるまちづくりのため、居場所とコミュニティづくりが進められていった。

「あらゆる人が、何らかの困りごとや課題を抱えている。支援が必要な人だと思えます。障がい者、高齢者といった属性を超えて人々がふれあう場が地域にあることで、住民の相互理解を深め、つながりを育みます」と白岩さんは力を込める。

### みんな若葉台が大好きだ！

前述のふれあいには、その居場所の一つだ。旧校舎の一室で定期的に弦

楽器「二胡」のサークル活動を行っているという女性グループの菊地幸子さん（74歳）は、「毎回終わるとここへ来て、みんなでお茶を飲んでおしゃべりするのが恒例です。スタッフも親切です」と笑顔で話す。「若葉台では何かやりたくて探すと、必ずと言っていいほどそういう場や仲間にとどり着きます。シニアの体操仲間のつながりから私たちのメンバーになった人もいます」とも。

まちづくりの担い手として、若葉台連合自治会や若葉台住宅管理組合協議会、NPO法人若葉台スポーツ・文化クラブ、そしてNPO法人若葉台などの地域活動団体が、住民の発意によって多彩な取り組みをしており、団体間のネットワークも密だ。だから安心して楽しく暮らせる。

「80・90代の方たちも、とてもアクティブです。『家にいないで地域に出来

しようよ』と声をかけ合っておられる  
す」(菊地さん)。いきいきと充実し  
た日々を送る人生の先輩たちを身近で  
見られることは、ここに住み続ける人  
たちにとって貴重だろう。

ふれあいにしのスタッフ、金本とみ  
江さん(75歳)は12年ほど前、自治会  
で活動してい

たときに同サ  
ロンがオープ  
ンすることを  
知った。「私  
を含めてみん  
な若葉台が大  
好き。若葉台  
の良さを語り  
始めたらずま  
らないですよ  
(笑)。私も  
ちょうど定年  
退職を迎える



二胡サークルの皆さん。  
購入した新鮮野菜を手に(左が菊地さん)

時期だったので、スタッフをやるうと  
思いました」

常連客に接する姿勢は相手が大人で  
あろうと子どもであろうと変わらない。  
「小学生もグループで来ますよ。ここ



ふれあいにしのスタッフ、  
金本さん(左)と小川さん(右)



ふれあいにしの常連、  
松崎さん

はいろんな人と自然に触れ合えていい  
ですね」と話す。

金本さんと同じシフトに入ることが  
多い小川涼さん(27歳)は若葉台で生  
まれ育った。作業所「ぶんげいざ」

に昼食を運んで利用者と雑談する  
のも素敵な時間だ。ふれあいにし  
のスタッフへの謝金は、3時間程  
度で1500円。お二人の表情を  
見ると、自分のライフスタイルに  
合っていて、自分の住む地域の役  
に立っている実感が励みになっ  
ていることが分かる。

ふれあいにしによくコーヒーを  
飲みに来るといふ一人暮らしの松  
崎俊夫さん(67歳)は、「ここは  
落ち着きますね。僕の生活にあっ  
て当たり前のような存在かな」。  
園芸クラブで近隣の人たちと一緒  
に草花の世話をするのもお気に入  
りの時間だそうです。

## ＊地域に暮らし、 ＊地域のために心を尽くせる幸せ＊

若葉台の広大な敷地の中央、「ふれあい広場」に面した「わかば親と子の広場 そらまめ」を訪ねた。月々土曜日の10～15時開所で、1家族年会費500円、1日100円で利用できる。

未就学児の親子が気軽に集まり自由に過ごせる居場所で、足も運びやすい。扉を開けると、棚には子どもたちの大好きなおもちゃがいっぱいだ。スタッフが絵本の読み聞かせをし、その世界に引き込まれる女の子。母親も穏やかな様子で見守っている。

そらまめはNPO法人若葉台が運営。子育て環境の充実こそ、高齢化が進む若葉台に必要な取り組みの一つと捉え、10年あまり前に横浜市の補助事業「親と子のつどいの広場事業」として、敷地内の空き店舗を活用。子育てサロン



「わかば親と子の広場  
そらまめ」

開催などの実績を持つ「若葉台子育てささえあい連絡会」をはじめ、各団体が全面的に支援して未就学児の親子の居場所活動を開始した。

3年前、長女が生まれて実家に近い若葉台に引っ越してきた近藤宣子さんは、区の赤ちゃん教室に参加して、そらまめを知った。「ちょうどコロナ禍で、幼稚園に入園する前に同じような子育て世代の方や先輩と知り合う機会がほとんどありませんでした」と話す。そらまめで子育ての不安を訴えれば、否定せずまると受け止めてもらえ

て元気が出てくる。ママ友ができて情報交換もするようになった。子ども同士が触れ合うことで「育ち合い」も実感できた。顔見知りが増えると、地域でお互い気にかけて見守り合ったりできるのが居心地がいい。

「人と人とが声をかけづらい時代ですが、公園に行けば、娘より年上の子が『かわいいね』と声をかけて遊んでくれたりもします」

施設長の春口悦子さんは語る。

「核家族化が進み、一人で子育てに悩む親は多いのです。だから『私たち応援団がいますよ』と伝えていきます」

そらまめでハイハイする赤ちゃんの様子に刺激を受けたのか、「自宅



そらまめスタッフが親子に絵本を読み聞かせ（右は近藤さん親子）



そらまめスタッフの神田さん（左）と  
施設長の春口さん（右）

ドセルを背負って親御さんと一緒に来てくれたりして、本当にうれしいです」  
スタッフは、幼稚園教諭や保育士等の有資格者8名体制。2017年には、要望が高まっていた一時預かり（1時間300円。最長4時間）もスタート。親自身が自由な時間を持てると喜ばれている。

利用者の立場から、自ら希望してスタップになった人もいます。神田翼さん

に帰ったらうちの子もハイハイを始めました」と弾んだ声で報告してくる親も。「そらまめを卒業したお子さんが『小学校に入学しました』とラン

（43歳）は、「結婚を機に保育士を辞めて若葉台に引越してきました。夫がこの出身で、『若葉台は子育てにいいと思う』と。子どもが生まれてからは、そらまめという居場所があったので癒やされました。今、スタップになって私が接してもらったように寄り添えることに充実感があります」  
ごく自然にあたたかな、感謝のバト  
ンリレー<sup>®</sup>が行われているようだ。  
「スタッフ同士で、応援団として何が  
できるかをいつも話し合っています」  
と神田さん。地域に暮らし、地域のた  
めに心を尽くす。だからやる気も湧い  
てくる。他へ就職したりすることは考  
えたこともないと笑う。

### 次世代を信じて体制づくり

NPO法人若葉台が展開する事業は、居場所・コミュニティづくり、障がい

者支援、福祉的農業の充実推進、成年後見等々、多岐にわたる。そこに挙げられている一つが、「新たな活動団体支援」だ。

「『すべては地域のために』という理念の実現のためには、常に変化し続ける地域課題を明確にして、活動をつくり出すことも大事」と白岩さんは話す。そして、コロナ禍を機にさらに増えた商店街の空き店舗問題を解決すべく、今年4月にはTeam Bloom<sup>™</sup>が誕生した。

「若葉台住民と若葉台出身者20名が中心の集まりで、私たちNPO法人若葉台は、居場所を提供するなどして支援しています」と白岩さん。

きっかけは、地元を離れていた若葉台東中学校の卒業生が地元に戻り起業したことだ。子育て世代は少数となり、シャッター通りになっていく地元商店街の現状に衝撃を受けた彼は、若葉台



Team Bloomの皆さん。  
中央左は白岩さん、その右が杉さん

を消滅させたくないと同級生たちに声をかけた。大好きな若葉台の商店街を「シッターゼロ」にしよう……。まずマルシェとフリーマーケットのイベントを開催し、大成功。現在、店舗を満室にするための企画を練っているところだ。

### Team Bloomのメンバー

ーで起業家の杉眞里子さんは、若葉台の高齢者を孤立させないためのさまざまな企画を考案している。スマホの歩数アプリを使ったレクリエーションなどアイデアは豊富。「手弁当ですが、手応えがあつて

楽しくてたまりません。若葉台にはいろいろな可能性がありますので張り切つて取り組んでいます」

白岩さんは言う。「私たちの活動に終わりはないのだから、新しい人材の受け入れや内部での育成など、人材の交代にも対応できる体制づくりをし

しながら持続可能な組織にしたい。そのためには外部の人や団体もどんどん連携して一緒に発展していきたいですね」

「後継者がいない」と諦めるのではなく、次世代を信じて任せることも大事だと強調。今後は、大学生に若葉台に住んでもらうことにも取り組む予定だ。

「『行政からお金を出してもらわなければ運営できない』と思ひ込まずに、自立できるシステムを自分たちでつくっていく。課題に对应えれば、参画してくださる人や企

## 認定NPO法人若葉台

横浜若葉台の福祉・環境・文化のまちづくりを推進するため、住民の手で2009年に設立。居場所・コミュニティづくり、障害者支援、福祉的農業の充実推進、成年後見事業の推進、実装実験の取り組み、新たな活動団体支援等に継続した取り組み体制を構築し、住民の心と生活が充実できるコミュニティを目指している。

●連絡先 〒241-0801

神奈川県横浜市旭区若葉台4-34-1

電話 045-744-7811

ホームページ <https://www.npowakabadai.com>

業・団体にきつと出会えるはずですよも教えてくれた。  
NPO法人若葉台の取り組みには、変化に対応し地域活動を維持発展させるヒントがたくさんありそうだ。

みんなで、誰もが安心して暮らせる  
地域共生社会をつくりましょう



公益財団法人  
さわやか福祉財団





お寺の本堂が子どもたちの放課後の居場所

た。以来、学童保育、フリースクール、プレーパーク、地域イベント等を展開。「なまらツナガル・TOKA<sup>ト</sup>INA<sup>カ</sup>KA<sup>カ</sup>」（「なまら」は、北海道の方言で「とても」「すごく」の意味）を合言葉に、子どもを真ん中として人々がつながる場を創り出してきた。その一つが「おちやのま」だ。

## ● 好きなだけしゃべっても 聞いてくれる人たちがいる

16時になると、お寺の厨房でボランティアによ

喜氏が「都会の中で、田舎のようにみんながつながり、地域の人たちが笑顔で優し  
くなれる社会を」との理念を掲げ、活動をスタートし

る夕食のための調理が始まった。この日来ていたのは、石原里桜さん（21歳）、橋元友菜さん（20歳）、川口葉名さん（20歳）。札幌市内の別々の大学の学生で、お互いに今日が初対面だ。「ほっかいどう若者応援★学生プロジェクト」と書かれたおそろいのエプロンを着けていたので聞いてみると、同プロジェクトはいろいろな大学の学生を集め、NPO法人の活動などにボランティアを送り出しているとのこと。コロナ禍での学生のコミュニケーション不足と、ボランティア団体の担い手確保という双方の課題を解決するための取り組みだという。

3人にここの印象を聞いた。「お寺で調理するのは初めて



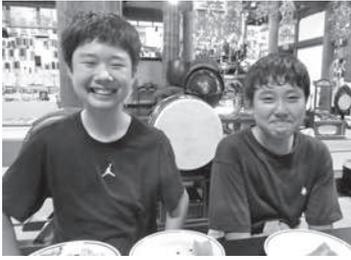
この日のメニューは栄養バランスもボリュームも満点



調理ボランティアの大学生。  
左から石原さん、橋元さん、川口さん



子どもも大人も、  
仏様に見守られながら本堂で夕食



高橋さん(左)と濱岸さん(右)

わせて約30人だが、  
常連さんとあって、  
食事中もみんなて  
会話が弾む。

やがて本堂にテー  
ブルとイスが並べられ、  
大きな釜や鍋も運び込  
まれて配膳が始まった。  
テーブルを囲んだのは、  
大人6人を含む15人ほ  
ど。「おちやのま」登  
録者は大人・子ども合

なので、とても新鮮」  
「子どもといると活力  
をもらえるし、他大学  
の人とも知り合える」  
「知り合ったばかりの  
人と料理を作って、み  
んな一緒に食べるのは  
貴重な体験」と、3人  
とも楽しそうに語って  
くれた。

濱岸奏汰さん  
(12歳)は6年  
生の頃から参加。  
放課後はE-I-L  
INKが運営す  
る学童保育へ通  
い、そのまま週  
一回ここへ寄る  
のが習慣になっ  
た。2人とも、

この日のメニューは、ご飯にかけたガリバター  
キン(鶏と野菜のガリックバター醤油炒め)、  
チョレギサラダ、油揚げとワカメの味噌汁、デザ  
ートのスイカ。  
ひときわ食欲旺盛だった中学1年生の男子2人  
組に話を聞いた。高橋真真さん(13歳)は小学4  
年生から「おちやのま」にきている。  
「友だちから誘われて来るようになりました。こ  
こにはいろいろな年齢の人がいて、世代を超えて  
交流できるから好きです」



子どもたちも、食後は自分たちで片付け

趣味だというロードレース用の自転車の魅力を熱っぽく語ってくれた。好きなことを好きなだけしやべって、それを聞いてくれる人がいるのが「おちやのま」の魅力だそう。

食事が終わりに近づくと、子どもたちは空っぽになった食器を厨房へ運び、自分たちで洗い始めた。家族以外と一緒に食べる場だからこそ身についた習慣だろう。

## ●「法事だけじゃもったいない」 住職の思い

E-LINKの寺小屋  
プロジェクトマネージャー、  
瀬川康さん（28歳）  
に話を聞いた。



E-LINKの  
瀬川さん

「私たちは札幌市の中心部、創成東エリアと呼ばれる地域で活動しています。創成川の西側が官公庁や企業のビル街、東側は住宅地でタワーマンションが立ち並びます。そんな都会の中に、田舎のようなあたたかいコミュニティをつくり、子ども

たちを中心にいろいろな世代をつなげたいのです」

寺小屋プロジェクトは以前、週1回の「おちやのま」と、2か月に1回の地域食堂を運営していた。この地域食堂を「おちやのま」と合体したのが今の姿だ。子どもの居場所である「おちやのま」にもっといろいろな世代の人を呼び込みたいとの思いがあったため、対象年齢が小学4年生から中学生だったのを、現在の「誰でも参加できる」に変更。地域みんなの居場所とするために協力を申し出た前任の第2層生活支援コーディネーターと地区民生委員児童委員協議会に働きかけたり、北海寺で活動している高齢者の運動グループ「水仙の会」にチラシを配布するなど工夫を重ねてきた。「これからさらに高齢者の方々とつながって活動していきたい」と瀬川さんは語る。

北海寺の6代目住職  
は、長谷川観樹さん。

北海寺は以前から、お茶室でお茶、和室で着付けと三味線、法要室



北海寺住職の  
長谷川さん

で高齢者の体操、本堂でヨガと、さまざまな地域活動に場を提供してきた。コロナ禍で子どもたちの遊び場がなくなっていた頃、E-LINKの学童保育帰りの子たちが境内で遊ぶようになって接点ができ、「広いお寺の敷地内ならコロナを気にせず走り回っていいから」と、「おちやのま」にも場を提供することにしたという。

「札幌市の真ん中にこれだけのスペースがあるのですから、法事以外に使わないのもったいない。北海寺が、『誰でもここへ来れば助けてもらえる駆け込み寺』になることが私の願いです」と長谷川さん。

### ● 支援者と「ツナガル」ちから

E-LINKは団体の拠点で週4日、「喫茶こともし」も運営。一杯500円のコーヒーや「おせつ会員」の月3000円の会費から、20%が子どもたちの支援やイベントに活用される「おせつかい」な喫茶店だ。



売り上げの一部を子ども支援に充てる喫茶「こともし」



「地域食堂・おかつて」でのバーベキュー風景

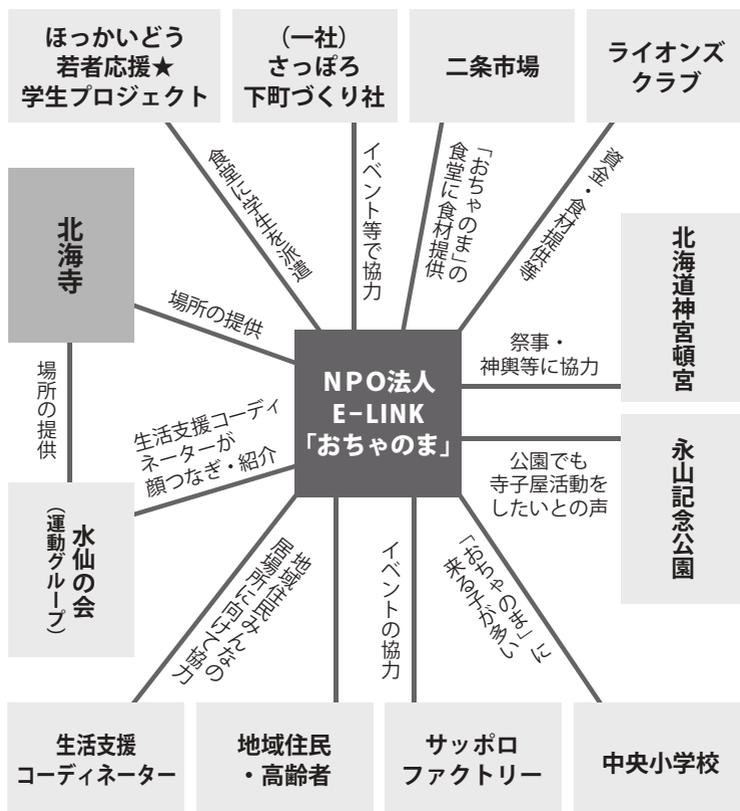
さらに、「地域食堂・おかつて」を3か月に1回開催。春は謎解き大会とお花見、夏はバーベキュー大会、秋はごみ拾いとおでん大会、冬は餅つき大会を行っている。日常的な食堂ではなく、特別な日として設定し、全年齢を対象に幅広く地域で交流しようというのが狙いだ。

「おかつて」の参加費は誰でも500円だが、運

営には地域住民や企業・団体の協力が欠かせない。E-LINKでは、活動への参加者を地道に募りながら、地域にネットワークを広げてきた（下图）。同じ中央区にあり観光スポットとしても有名な札幌二条市場からは、バーベキューに使う海鮮食材を提供してもらっている。ライオンズクラブはイベントごとに資金を提供し、餅つき大会などではメンバーも参加してくれる。こうしたさまざまな協力が得られるようになったのは、創成東エリアを楽しくする活動をしようという有志の団体「一般社団法人さっぽろ下町づくり社」の協力が大きいという。他団体の支援を受けることも活動を広げるコツといえるだろう。

難しいといわれる都会でのつながりづくり。「トカイだって、イナカみたいにつながれる」こ

とを、E-LINKから全国のトカイに発信して  
 くれることを期待したい。



# 応援ありがとうございます！

## 「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、「コミュニティ食堂の再開、防災訓練、助け合い活動を紹介します」。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

神奈川県平塚市

### 地域と連携したコミュニティ食堂 コロナ禍を経て活動再開へ

なでしこ放課後みんなの食堂

助成金額 15万円

平塚市なでしこ地区は7自治会で構成されており、地区社会福祉協議会、福祉村、民生児童委員、小学校、商店街と連携して活動しています。2019年11月、地区民生委

員児童委員協議会関係者が主体となり、地区で初めて地域と連携した子ども中心のコミュニティ食堂「なでしこ放課後みんなの食堂」をスタート。月1回開催で、コロナ前までの4か月の延べ参加人数は280人。20年からはコロナ禍のため食堂



テイクアウト弁当を作るボランティアの皆さん

をフードパントリーに切り替え、寄付されたお米や食品等を無料配布してきました。

孤食をなくし、地域の居場所としても機能する取り組みは、地域コミュニティが築ける大事な活動だと確信し、コロナ収束後、食堂と弁当配布という形で活動を再開することとしました。

今回の助成金では、活動再開のための自治会館のキッチンリフォームを行いました。この工事には住民の許可が必要なため、自治会長に相談し、700世帯の近隣住民に手紙を出したところ、応援メッセージや食材の寄付をいただくなど支援の輪が広がり、テイクアウト弁当を一律100円で提供できるようになったそうです。毎回70〜80食が完売し、地域連携ができていたため小学校や民生委員の協力が必要なるにも支援が届く体制となつています。

今後は子どもたちと高齢者の交流や学習支援を行い、ボランティアがますます元気に活動できる工夫もしていきたい、といううれしい報告が届きました。



訓練での安否確認結果報告をする地域の皆さん

## 「我が家は全員無事です」 表示物を掲げる防災訓練

奈良県生駒市

鹿ノ台中学・小学校区防災協議会

助成金額 15万円

鹿ノ台中学・小学校区防災協議会は、鹿ノ台自治連合会（11自治会）、鹿畑自治会、美鹿の台自治会、うぐいす谷（旧久保12班）自治会の約3300世帯・約9000人で構成され、災害時の避難所を共同で設置利用するため、各自主防災会と自治会の有志により毎年趣向を変えた防災訓練を行っています。近年では大災害に備え、発災時の支援の要否を確認するために、玄関に「タオル掛け・安否確認訓練」を行っています。災害時に近隣住民がタオルの出していない世帯を個別にフォローし、素早く避難弱者を見つけ出して、避難所への誘導およびケガ人を救急搬送することを目的としています。今回の助成金は、訓練内容パンフレット

とタオルより安価な「我が家は全員無事です」の表示物（アドバック）作成等に活用。約3100戸を対象に、市の防災無線や防犯パトロール車でも訓練実施を告知し、朝8時に大地震が発生した想定で、家先にアドバックを掲げる訓練を行ったそうです。

訓練では、約66%の世帯が玄関などにアドバックを掲示しました。悪天候などの理由から目標の80%には届かなかったため、今後も毎年春と秋の防災訓練時には全世帯がアドバック掲示を体験できるように安否確認訓練を継続実施し、防災訓練を通じて、近隣との助け合い、見守りなどの啓蒙活動をしていきます、との報告をいただきました。



助成金で作成したアドバック

アドバックを掲



陽だまりクラブの皆さんと団体所有の車いす対応福祉車両

## 住民同士の助け合い活動 移動のニーズに応え、訪問Bに

広島県東広島市

認定NPO法人 陽だまり

助成金額 15万円

「陽だまりクラブ」は自分たちにてできる社会貢献をしようと2000年10月、主婦5〜6人の任意団体で活動を開始。主に東広島市を活動地域とし、当初から「ちよっとした困りごとは市民同士で助け合おう」と活動してきました。会員制で年会費3000円、謝金は1時間800円、うち600円をお手伝いした会員が受け取る仕組みです。家事や介護といった身の回りのことをはじめ、生活での困りごとをお手伝いしていますが、中でも移動のニーズが高く、頼れる身内が近くにいないなどの理由から、病院受診や買い物は送迎だけでなく付き添いも希望する相談が絶えませんでした。

## 「地域助け合い基金」 状況のご報告

地域助け合い基金は地域共生社会実現のための活動を支援し、能登半島地震の被災地・被災者にも支援を実施しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

(8月15日) 当財団ホームページ開示時点  
このうち当財団より1億6162万1000円を供出

◎寄付受付額	248件	1億9434万0337円
◎助成実行額	1175件	1億8118万8965円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード  
決済ページ



財団ホームページ内  
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

### 基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金  
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

そのため、今回の助成金をスタッドレスタイヤ購入や自動車保険・ボランテニア保険の保険料等に活用し、安全運行の環境を整えました。23年度は、移動サービス利用登録者70人に対して延べ1140回の支援を行ったということです。

24年度からは陽だまりクラブが市の訪問型サービスBに

位置付けられることになり、地域への波及効果が期待されていると感じたそうです。少子高齢化や外国人市民の増加等から今後は地縁関係ではない「第3のつながり」がますます重要、未来の自分のためでもある助け合い活動の魅力を広く伝え、仲間を増やしていきたい、と報告をいただきました。

## ―認知症との 新しい向き合い方

社会医療法人財団石心会理事長  
川崎幸クリニック院長

杉山 孝博



(すぎやま たかひろ)  
1973年東京大学医学部卒。1998年9月川崎幸クリニックス院長に、2023年7月社会医療法人財団石心会理事長に就任。1981年から公益社団法人認知症の人と家族の会の活動に参加。全国本部の副代表理事(副代表)。公益社団法人日本認知症グループホーム協会顧問、公益財団法人さわやか福祉財団評議員。著書は、杉山孝博著「マンガでわかる 認知症の9大法則と1原則」(法研)、杉山孝博監修「認知症の人の不可解な行動がわかる本」(講談社)など多数。

## 「認知症」および 「認知症の人」について思うこと ―その3―

認知症の人は、周囲の人との関わりの中で、暴言・暴行・興奮・拒否などの激しい言動を示すことが少なくありません。これらは行動・心理症状(BP・SDともいう)と呼ばれていて、介護家族はもちろん、医療・介護専門職であっても対応の難しい症状です。

「介護者に向かって暴言を吐く」「突然怒り出して周囲の人に殴りかかった」「やさしく説明したのに聞き入れない」などのように、認知症の人が一次的

に激しい言動をすると、多くの人は考えているように思いますが、私は、周囲の人の言動に対する反応(リアクション)であると考えています。認知症の人に接するものが、次にあげる「3原則」に抵触した場合に、認知症の人は激しい言動をするのです。

**第1原則 本人の記憶になれば本人にとっては事実ではない**

記憶障害は認知症の最も基本的な症状で、直前の



ことすら忘れるひどいもの忘れや、大事なことや体験したことも忘れることがしばしばです。

「何度も同じことを言わないで、うるさいよ」「今説明したばかりでしょう。どうして分らないの」

「あなたも納得してくれたじゃないの」「ご飯は今食べたばかりでしょう。これ以上食べるとおなかを壊すからダメよ」などと言っても、本人は納得しません。なぜなら、本人の記憶から消えているので、周囲の人が言うことは自分にとってありえないことで、「ペテンにかけようとしているのではないか」と猜疑心を募らせることになりかねません。そのような状態になったら、事実関係を認めさせようとすることはあきらめて、「そうね、私の勘違いだったかしら」のように、中断したほうがよいでしょう。

**第2原則 本人が思ったことは本人にとっては絶対的な事実である**

「この人が私の大切にしてたものを盗んだ」「(服薬したことを忘れて)薬を飲んでいない」「(食事をしたことを忘れて)まだ食べていない」「(記憶

が昔に戻って)私の夫はもつと若い。こんなおじいさんは私の夫ではない」等、認知症の人の世界では、第2原則のように、絶対的な事実としてとらえられます。正しく教えようと考えると否定すると激しい反発が出てきます。まずは受け止めて別の話題に切り替える方が現実的な対応と言えるでしょう。

**第3原則 認知症が進行してもプライドがある**

「お父さんは昔学校の先生だったのに、こんな簡単な問題が解けないの」と言われたり、若い介護職や子どもから「そんなことをしてはダメと言ってるでしょう」などと言われると、プライドを傷つけられたと感じて怒り出すことがあります。どんなに認知症が進行しても、プライドはいつまでも残るものです。自分と同じ気持ちを持つ人としてとらえて、プライドを傷つけないような対応が大切です。

かつて高校の教諭をしていた人に対して、ヘルパーが「先生、身体を拭いても宜しいですか」などと話しかけると、機嫌良くケアを受けてくれたといいます。(次号に続く)

## 人生100年 地域とつながる施設とは

5

# 介護の人手不足が止まらない

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

国立社会保障・人口問題研究所の報告で、2023年の合計特殊出生率は1・20になったことが明らかになりました。数字で見ると、改めて日本はどうなるのかと危機感が募ります。減少の背景にはコロナ禍があると言われていますが、感染症法5類移行後も減少は止まらないだろうと言われています。すでに介護分野では、コロナ禍前から人材不足は深刻化してきており、介護福祉専門学校の定員充足率が2022年度は36・7%、2023年度は26・



(ほんま いくこ)

図書館情報大学卒業（現筑波大学）。さわやか福祉財団評議員、学校法人光塩学園評議員。利用者の人権を守るための高齢者生活施設の認証・評価事業を創設。全国の介護施設や市民向けセミナー講師を務める。ハ表彰▽2005年国際ソロプチミスト東京受賞、2010年エイボン女性大賞受賞。ハ著書▽多数。近著『この一冊でわかる特別養護老人ホームを選ぶチェックポイント』（30ページ）。お申し込みは、AmazonかUビジョン研究所（電話03・6904・4611）へ

9%となり、募集を停止するところが出てきました。同じく大学の福祉関係学部でも閉鎖が止まりません。そのうえ、福祉関係学部を出ても介護分野に就職するわけではなく、年々、新卒の採用が厳しくなってきています。

この影響で、人材紹介所を頼るようになってきました。福祉医療機構が行った「2023年度特別養護老人ホームの人材確保に関する調査」では、正規職員1人の採用に支払った人材紹介所への手数料は

平均91・7万円、1年間で支払った手数料は平均290・8万円だったことがわかりました。

それでも厳しい現状は続いており、一部、居室を閉鎖するところも出てきています。対策として、介護補助に高齢者や障がい者の人、外国人採用に力を入れています。さらに、厚生労働省は介護ロボットやICTの導入で、記録、情報の共有、データ、事務ワークなどの効率化を図ろうとしていますが多く、経営者は導入に前向きではありません。



朝食を1人で準備 キッチン (22歳、介護の仕事始めて8か月、1人で10人の入居者の朝食の準備をして、介助もします)

理由は、介護は人手をかけるほど良いケアだという考え方が根幹にあるのだと思います。もちろん、人間性のない効率化は人をしあわせにすることはできませんが、効率化できるところとできないところ

を明確にして理解してもらう必要があります。

私は評価機関として職員の仕事のヒヤリングをする機会があります。20代初めの新人職員に、「介護の仕事が続けていきたいですか」と聞くと、職員は「両親が共働きでいつもおばあちゃんの家で過ごしていました。いつもやさしく、美味しいものをいっぱい作ってくれました。おばあちゃんが大好きでした。おばあちゃんは今もう亡くなりましたが、老人ホームで暮らしている高齢者に恩返しをしたい」、「笑う時の顔にいつもほっこりします。逆に私が癒されます」と、「介助するのは当たり前なのに笑顔で「ありがとう」と言ってくれます。こんなに感謝される仕事は他にはありません。達成感があります」という答えが返ってきました。

高齢者にやさしく温かいケアをできる人は、祖父母に大切にされ愛情を注がれたということと、地域の中で多くの人のやさしさに触れた経験が生きていると思います。やさしさのあり方は市民力が活きていると確信しています。希望を持っています。

# いきがい・助け合い オンラインフェスタ2024

## プログラム

### オープニングフォーラム

#### 「地域共生社会をみんなでつくるための提言」

地域での取り組みを具体的に働きかけていく上で、これからの社会はどのような視点が重要かを、豪華なパネリストのそれぞれの立場から事例も含めて語ってもらいます。

- 進行役** 宮本 太郎氏 中央大学法学部教授  
**登壇者** 村木 厚子氏 (社福)全国社会福祉協議会会長  
西 智弘氏 川崎市立井田病院腫瘍内科部長、(一社)プラスケア代表理事  
丹野 智文氏 (一社)認知症当事者、ネットワークみやぎ代表理事  
熊谷 美和子氏 (特非)たすけあい平田理事長

### 特別トーク

- 飯島 勝矢氏 (健康長寿と幸福長寿)
- 石山 麗子氏 (ケアマネジメントと助け合い)
- 近藤 克則氏 (助け合いの評価)
- 杉山 孝博氏 (認知症基本法と地域づくり)
- 高橋 陽子氏 (企業の社会貢献)
- 田中 滋氏 (地域共生社会とつながりづくり)
- 辻 哲夫氏 (住民主体の助け合いの基盤づくり)
- 中村 秀一氏 (これからの社会保障政策と行政の伴走支援)

### 学ぼう編

生活支援コーディネーターの任務と役割／協議体の構成と取り組み方／共生型常設型居場所／有償ボランティア／近隣助け合い／認知症の人と共に生きる地域／シニアの地域参加／子どもの育ちを地域で応援

### 語ろう編 ※ライブ配信のみ

生活支援コーディネーターと協議体はどう働きかけたらよいか／居場所と有償ボランティアをどう広げたらよいか／つながりづくりの進め方

- ◆ オンラインフェスタ概要は、表紙裏も併せてご参照ください。
- ◆ さらに詳しい内容は、財団ホームページ内オンラインフェスタ特設ページからもご覧いただけます。

URL : <https://festa.sawayakazaidan.or.jp>

# 新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、  
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、  
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる  
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・  
ご寄付者の皆様のご紹介

- **さわやか活動日記（抄）**



# ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2024年7月1日～7月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合があります(ご了承ください)。

## さわやかパートナー個人(48件)

(都道府県別50音順)

北海道	埼玉県	本多 則恵
加賀谷 之治	佐伯 正孝	森脇 亜人
宮城県	為ヶ谷 喜一郎	神奈川県
菅原 宏之	千葉 照見	神奈川 神奈川
福島県	加藤 照見	佐久間 博
三浦 彰	杉本 類子	瀬戸 正
茨城県	寺尾 徹	西島 康二
丹 協子	東京都	藤田 和弘
丹 文子	宇野澤 虎雄	吉田 憲正
栃木県	長田 延満	福井県
橋本 玲子	加藤 洋一	武藤 功士
正岡 太郎	黒瀬 義郎	岐阜県
群馬県	千葉 春彦	河合 俊宏
井上 謙一	人見 敏郎	坂口 正恭
		清水 孝子

## 静岡県

鈴木 明与

田中 昭彦

平田 厚

愛知県

大秋 恵子

木下 敬一

中井 恵美子

森 光廣

山田 勉

## 兵庫県

佐野 正明

名倉 啓恵

岡山県

神田 典治

村松 章子

山口県

池本 君子

愛媛県

高橋 敦

## 高知県

三谷 英子

福岡県

潮 ハルミ

佐賀県

江口 陽介

大分県

杉森 哲

## さわやかパートナー法人(5件)

(50音順)

医療法人財団俊陽会古川病院  
土屋建設株式会社  
認定NPO法人東葛市民後見人の会

## 一般ご寄付(4件)

(50音順)

株式会社東京映画社  
日本製鉄株式会社

蘭牟田 忠男(1万円)

加藤 孟(1万円)

佐藤 俊子(3千円)

富士急行株式会社(1万円)

## 地域助け合い基金ご寄付(3件)

(50音順)

八石川県・能登半島地震支援V

全国交流フォーラム募金箱(4万7501円)

城 知子(1万円)

匿名希望(1万円)

# さわやか活動日記(抄)

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

## SC・生活支援体制整備事業担当者情報交換会 事例とグループワークで理解深める

■ 神奈川県

「7月4日」神奈川県「生活支援コーディネーター・生活支援体制整備事業担当者情報交換会」が開催され、県内各市町村のSC、行政担当者など約20名が参加し、当財団、神奈川県のさわやかインストラクター島津禮子氏が協力した。

県のあいさつと説明の後、



財団・鶴山より「生活支援コーディネーターと協議体に期待される機能・役割―事前アンケートをもとに―」と題して講義。事前実施した参加者アンケートで上がった課題や悩みを基に、全国の事例を紹介しながらその解決につながるさまざまな手法やポイントを

紹介した。例えば、「行政主導という認識が払拭できない」という課題に対して「自分事と思う人を増やす。SCは住民主体の地域づくりを推進する仕掛け人であり、そのためにも協議体をはじめとする住民の力を借りることが大事」と伝え、兵庫県神戸市灘区の取り組みや山梨県南アルプス市等の事例も紹介した。

また、「住民自治会、老人クラブ」など、充て職になり主体的な動きが広がらない悩みに対しては、地縁組織の中で主体的なメン

バーで課題解決を話し合う取り組みを始めた新潟県新発田市や、役の人たちの理解を深め協議体づくりに協力してもらう動きを進めた愛知県北名古屋市などの事例も紹介した。

参加者から「サービスをつくらなきゃ、と考えてしまいが、焦らずじっくりやるう」と思った」との声がかれた。

事例報告は同県川崎市の「認定NPO法人すずの会」代表の鈴木恵子氏より。活動を立ち上げた経緯、ミニデイや居場所等の活動を通



神奈川県研修でのグループワークの様子

じて分かったこと、活動の質を保つために野川地区という小さなエリアで深く活動を展開してきたことなどが話された。鈴木氏から参加者には「規模は地域によ

って違うので、見極めはS Cの皆さんの仕事。住民の力をどうやったら生かせるか、自分たちが動いて、行政を動かしてほしい」とメッセージが送られた。（す

ずの会の活動は、本誌6月号にも掲載）

県内自治体からの事例紹介は、大和市（助け合いの取り組み）、愛川町・海老名市（社会参加の推進）。

グループワークは、行政担当者のグループ1つとS Cのグループ3つで行った。テーマは「市担当として生活支援コーディネーターへの支援を効果的にするには

どうしたらよいか（行政担当者のみ）」「住民主体の取組を広げるには、活動をどう支援したらよいか」「協議体の活動を活発にするにはどうしたらよいか」「担

手の発掘について、どうしたらよいか」「移動支援や居場所づくりなどの具体的なサービス創出や、活動の継続のためには、どうしたらよいか」。ワークの後、発表で全体共有した。話し合いでは、ベテランが経験の浅い人に助言する様子などもあり、有意義な時間となったようだった。

最後に、財団・丹直秀理事、すずの会・鈴木氏、鶴山からコメントした。

（丹）自身の地元自治会活動から、30・40代の参加者

も増えていると実感。世代を問わず身近なところから接点を増やすことが大事。

（鈴木氏）地域には必ず優秀な人がいる。そういう人を見つけてことに楽しさを見いだしてほしい。

（鶴山）今日の気づきを今後に生かし、動いてみることが大切。また、助け合い活動は立ち上げてすぐに住民の反応があるとは限らない。頼んでよい、安心だといふことが伝わると少しずつ参加者が広がる。待つことも大切。

終了後も質問が出るなど、参加者の気づきや参考となる情報交換会になったようである。今後の事業推進と活動創出に期待したい。

（鶴山 芳子、窪田 健二）

## SC養成初任者研修 グループワークでSC・協議体の役割考える

■福井県

〔7月11日〕福井県主催「SC養成初任者研修」に協力した。集合型の全日研修で、グループワークの時間を多めに確保、受け身でなく「自分で考える」ことを意図したプログラムとしている。初任者以外でも参加可能としており、県内SCのほか、行政担当者、社協等の約40名が参加した。

最初の講義の前に、自己紹介とこれからやりたいことを話すミニワークを行い、雰囲気はほぐれ、以降のグループワークでの話しやすさにつながった。

当財団からの講義①「S

Cに期待される役割」の後、グループワーク①「SC・協議体の役割を住民にどう伝えるか」を実施。「自分からさまざまな場所に向向いて話をする」「地域に関心を持って、つながりのある場をつくる」などの意見が上がった。財団からは、「いつ、どこで、誰に対して」といった具体的な行動に落とし込むことで実践活動につながることを伝えた。

続いて、長野市第2層SC平野歌織氏による講義②「SCの活動内容について」、財団からの講義③「住民主体の活動創出の取り組み」

を実施。

グループワーク②「住民のニーズ把握、地域住民との関わり方」では、「老人会やサロンで話を聞く」「地域のドンに話を聞く」「アンケートより直接話を聞くほうがよい」等の意見が出た。財団からは、アンケートと個別訪問のメリット・デメリットを説明、両方組み合わせて活用している事例を伝えた。

福井県では今後、SC向け研修として、実践力向上のための全体研修、SC同士のネットワークをつくる情報交換会を開催していく。

(高橋 望)



福井県SC養成初任者研修の様子

## 地域支え合い推進員連絡会 地域資源の現状や課題等を議論

■さいたま市（埼玉県）

〔7月19日〕さいたま市の「さいたま市地域支え合い推進員連絡会」で講師を務めた。参加者36名。同市ではS・C（地域支え合い推進員⇨生活支援コーディネーター）のスキルアップを目的として、S・C新任者向けの開催も含めてこの連絡会を年5回開催している。

今回は、事前に参加者に対して現状の課題を挙げてもらい、課題解決のヒントとなるよう財団が講義を行った後に、グループワークを実施。各S・Cが地域のアセスメントシートを作成することに伴い、地域資源にも注目したテーマにした。この依頼を受け、資源開発も含めて「現状と課題」「今後の活動で工夫すべき点（新たにアプローチしたい資源）」「活動にあたって希望する支援」の3点について話し合ってもらった。

十分な話し合いができるようグループ人数を4名と少なくしたため、大変活発な話し合いとなり、全グループが発表して情報共有した。上がった課題は、「担い手の確保」「通いの場の創出に向けた場所の確保」等。研修会の冒頭で、市高齢福祉課より移動支援事業（補助事業）についての説明などもあり、活動にあたって希望する支援では「移動支援」が上がった。特に、移動の車両を確保するために、企業や介護保険事業所等との橋渡しを行政に望む声が多かった。場所の確保については、企業に働きかける場合は特に行政の後方支援が有効であり、訪問時の同行や、アンケートへの協力、ホームページへの掲載等による支援が欲しい、といった意見もあった。また、空き家の活用に対する支援を希望する声も多く、協議の場の設置などの希望が上がった。

工夫したい点として、住民活動をさらに活発化させるための活動発表会や、活動参加へのハードルを低く



さいたま市地域支え合い推進員連絡会の様子

するための体験会の開催、車両での移動に頼らない徒歩圏内での活動場所の検討、民間企業や事業者との連携強化のための定期的なネットワーク形成の機会の設置等が出ていた。

さいたま市は政令指定都市であり、企業等の資源や



## 情報・調査事業

### 厚生労働省 地域づくり加速化事業 第1回運営委員会に出席

〔7月19日〕「令和6年度地域包括ケアシステムの深化・推進に向けた広報・伴走支援を行う地域づくり加速化事業 第1回運営委員会」が開催され、委員として出席した。最初に、厚生労働省老健局認知症施策

人材が豊富だが地域差もある。今回のような連絡会等での情報共有からヒントを得て、それぞれの地域性に合わせた活動が推進され、助け合い活動が面としてさらに広がることを期待したい。

（岡野 貴代）

・地域介護推進課長の吉田慎氏が開会あいさつ。地域を専門職以外の高齢者も含めた多様な主体全体で支える必要性と、そのために総合事業を活用して地域づくりを推進していく、という加速化事業の意義と期待に

ついて話した。昨年を引き続き、委員長を務める大坂純氏（東北こども福祉専門学院副院長）の進行で、副委員長の田中明美氏（奈良県生駒市特命監）を含む全11名の委員で議論を行った。

内容は主に、(1)地域づくり加速化事業について、(2)支援市町村選定及び担当アドバイザーについて、の2つ。

(1)は今年度の事業概要とスケジュール、スキルアップ研修会をはじめとする関係者向けの研修や共有の場について。さらに伴走支援の進め方や評価、支援ハンドブックについて等、事務局の説明を受けて議論した。3年目となる本事業の中で

さまざまなノウハウや成果、課題が生まれており、委員会で共有しながら、よりよい地域づくりが進むように議論を重ねてきた。例えば、昨年度フォローアップとして支援を受けながら取り組んだまちでは年間経費が軽減され、サービスA（基準を緩和したサービス）の利用者30名以上が住民主体の通いの場へ移行するなど、目に見える成果が生まれているという。中長期の視点を持ちながら、さまざまな立場の人たちがつながり、議論や取り組みで気づきを得て主体的な地域づくりへの取り組みが推進されるプロセスにおいて、動画を作成し発信することも効果的ではないか、といった提案

など前向きで活発な意見を  
たくさん共有できた。

今年度から第9期介護保  
険事業計画が始まったが、  
この3年間で生活支援体制  
整備事業を推進しながら総  
合事業を充実していくため  
のプラットフォームの動き  
が国や都道府県で始まって

### 社会参加推進事業

## 高齢社会NGO連携協議会 今年度第2回役員会開催

〔7月22日〕2024年度  
第2回高齢社会NGO連携  
協議会（高連協）役員会が、  
大内尉義氏（一般社団法人  
日本老年医学会名誉会員・  
元理事長）と清水肇子当財  
団理事長の両共同代表出席

いく。そのような中で、加  
速化事業による伴走支援を  
受けながら具体的な取り組  
みが25市町村で進んでいく。  
住民が安心していきいきと  
暮らせる地域づくりにつな  
がるよう、一緒に考えなが  
ら推進していきたい。

（鶴山 芳子）



の下、理事9名、監事2名、  
計13名（うち、委任状2名）  
参加で開催された。

主な議題は、1・高連協  
創立25周年記念イベントに  
関する件、2・政策提言事  
業（アンケート調査事業）  
に関する件。

25周年記念イベントは来  
年2月開催予定とし、本年  
政策提言事業でもあった高  
連協共催事業、第66回日本

老年医学会学術集会シンポ  
ジウム（6月13日）を受け  
て「エイジフリー社会」の  
冠の下、会員団体の活動の  
相互理解を目的とする。あ  
わせて、アンケート調査事  
業を全会員横断で実施し、  
高連協としての提言をまと  
めることとした。それに伴  
い実行委員会を設立し、ス

ケジュールを決定して役員  
会と連携しながら運営する  
こととした。

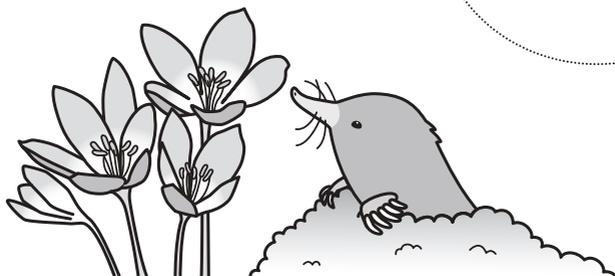
その他、当財団主催「い  
きがいがい・助け合いオンライ  
ンフェスタ2024」への  
高連協の名義後援が全員一  
致で承認され、広報および  
集客への協力を確認した。

創立25周年記念イベント、  
オンラインフェスタともに、  
高連協事務局として財団の  
社会参加推進事業へつなげ  
たい。  
（玉置 英明）

### 事務所 だより

●「いがいがい・助け合いオンラインフェスタ2024」  
の準備を皆で進めている。9月は事前収録がピークを  
迎えるが、収録時、本番の前夜で登壇者の方々からち  
よっとした情報をいただくことがあり、実はそういった情報  
が財団にとって宝だったりする。財団が情報センターを目指  
す上で、大事にしたいと思っている。

# みんなのひろ場



## 投稿募集

皆様のご意見や情報をお待ちしています

掲載記事へのご感想、地域の助け合いや居場所の情報、社会参加の取り組みや、日頃気になっているテーマなど、ぜひお寄せください。

## 送付先

さわやか福祉財団『さあ、言おう』編集部宛。郵送の場合は、付属のハガキや投稿用紙をどうぞご利用ください。

E-mail :  
pr@sawayakazaidan.or.jp



清水理事長の巻頭言、本間郁子さんのエッセイ、興味深く読んでいます。また、毎号「さわやか活動日記（抄）」でわが町と同じような状況や取り組みを読み、「頑張らなくちゃ」と思っています。

少しずつでも  
変化してくれたら…

匿名希望さん

（地域包括支援センター）

新潟県

「困りごとは何でも行政へ」という高齢者の根強い考えに何度もぶち当たります。少しずつでも変化してくれたらなあ…。

当たり前と想ってきた環境が大きく変わるうねりの時期、先頭に立つて進めるのは本当に苦労が多いですね。「負担」ではなく「役割」が見えれば、人はつながりやすくなります。共感してくれる高齢者も必ず地域にいるはず。仲間も全国に大勢います。じっくり、皆で少しずつ、前へ。



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人  
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人  
年会費  
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を  
いただく場合の  
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

\*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。  
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵

はり絵・池田げんえい



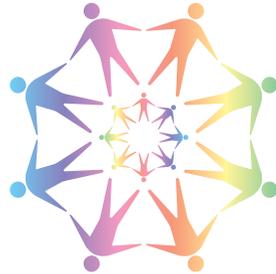
「残涼」

編集後記 ●「活動の現場から」は横浜・若葉台。郊外型大規模団地の持続可能なまちづくり・仕組みづくり。実に多彩です(P4~)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」、トカイでもイナカのようにつながろうと取り組む、子ども真ん中のNPOによる活動です(P12~)。●杉山孝博さんが、認知症の人の行動を理解するための3原則を教えてください(P22~「共生社会—認知症との新しい向き合い方」)。●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」の参加お申し込みを受け付け中。皆様の参加をお待ちしています！(表紙裏、P26)

助け合いを  
広げよう!



追田 朋子



東日本大震災後「復興サポート」という番組で、

地域の特色を活かした過疎地での取り組みを

被災者に映像で紹介、

当事者との交流の場をつくった。

地べたの民主主義 と評された。

対等な感覚で知恵を共有し励ましあう…

生活者の底力だ。

●ジャーナリスト

NHK解説委員時代に「こころの時代」でインタビューをさせていただいた社会学者鶴見和子さんの著作を読み直しています。“内発的發展論”は、大きな示唆を与えてくれます。

## たのしみ 9月号

通巻373号 2024年9月10日発行  
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい  
取材協力 七七舎  
イラスト すずきひさこ  
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子  
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団  
〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階  
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp  
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>  
Printed in Japan

# 助け合いの地域づくりに、 当財団のツールをぜひご活用ください

当財団HPトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は1,100円(税込・送料別)となります。

## みんなでやってみよう!

### 訪問助け合い活動

お互い様の気持ちを一步進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。



## いつでも誰でも行ける場所を 広げよう!

### 居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。



## 新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動における、ニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。



【お問い合わせ・お申し込み】

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp